

勇者がボスを  
倒しに行く

茜色一凜



# 目次

コーヒーの香りが冷めぬ間に雷 . . . . .	1
突然の救援は小さな男の子 . . . . .	2
少年の生い立ちと、さらなる希望 . . . . .	7



## コーヒーの香りが冷めぬ間に雷

毎日がいつも同じで飽き飽きしている。たまには何か変化がないとつまらないものだ。いつもと同じように起きて、そして学校に向かうだけの毎日。今日は部活の早練なので、朝の6時に起きて、顔を洗い歯を磨く、メイクをしながら、眠気覚ましのコーヒーを飲んで出掛けるといふ、いつものルーティーンを繰り返すだけである。

インスタントコーヒーの味も悪くない。よほどこのメーカーは研究に研究を重ねて作ったと思うと、不思議な感じがする。もしかしたら、なかなかいいものが出来ずに徹夜明けを繰り返しながら作ってきたのかもしれないし、下手したら傲慢なリーダーのせいでは何名もの優秀な人がいじめられながら、涙を流して作ったものなのかもしれない。

そんなことを考えているうちにそろそろ出発の時間が差し迫っていることに気づく。

紹介が遅れました。私は水野あず高校2年生。髪はボブでミディアムヘアーといったところ、性格はとてもおとなしく、のんびり屋さんの性格でときおり、意味のないことを延々と考えすぎてしまう。さて出掛けよう。コーヒーを飲み干すと、ラケットを片手に家を飛び出す。

「いってきまーす」誰からも返事はないが、取り敢えず言いたいのだ。もしかしたら家族の誰かが聞いているのかもしれない。

扉を開けて、家から出た瞬間。薄暗い空から大きな稲妻が落ちた。私のラケットめがけて落ち、すぐに、体は地面に崩れ落ちた。

## 突然の救援は小さな男の子

「うっ」あれからどれくらい時間がたったのだろうか。何かが近づいて来るのが分かる。私はまだ地面の上でおねんねだ。足音が次第に少しずつ大きくなってきている気がする。頭を少しあげると、目の前には白鬚を生やしたおじいさんが1人いた。顔はしわくちゃで近所にこんな人いたかな。この人は一体誰なんだろう。

「起きたかね。」「庭を歩いていたら変わった人間に出会ったものだ。」

そういうと向こうの山の方を指差す。

「何も聞かずに、取り敢えず行ってみなさい。君は何故ここにいるかわからないけど、取り敢えずここに来た人間はあの山を目指すようだ。」

そういうと老人はパンみたいなものをひときれ私の頭のところに置くと、また歩きだしてしまった。

「まってください。ここはどこなんですか？」

辺りを見回すと、先ほどのいつも見慣れた私の家は消えていて代わりに見たこともない風景が広がっている。

歩きながら老人は、「君たちがよく言う異世界なのかもしれんの。」

私の弱々しい声はもう届かなくて、体の状態を確認する。、たしか雷に打たれたんだよね。それなのに体は全然大丈夫そう。それに置いていったパンこれって食べても大丈夫なんだろうか？

ティッシュペーパーもないしこんなところでお腹を下したら最悪なことになってしまう。誰もいなければその辺の葉っぱで拭くことも考えないといけないかもとも思うが、もし

食料が何もなくておなかのすいた時を考えると、腐っているかもしれないパンを持っていくことにためらいはなかった。

そもそもこれはパンのように見えるけど、パンなのかも疑わしい。だって日本ではないのだから。かといって外国に飛ばされたわけでもない。

とりあえず、パンを鞆にしまいこんで、歩きだす。唯一の食料だ。一体ここはどこなんだろう。

さっきまで家の玄関口に立っていたのに、何がなんだか分からない。

もかしたら死んだのか？ それとも何かの拍子に、他の世界線に飛ばされてしまい変な場所に来てしまったのかもしれない。

ようやく落ち着いてきて、辺りを見回すと、花の良い香りがする。人間の順応力の素晴らしさにこの時ばかりは少し驚いてしまった。

何の花だろう。見たこともない花だ。例えば、タンポポが大きくなったような高さは2メートルほどもある大きな花だ。それが一本道の両側に無数に咲いているのだ。

たんぽぽの絨毯のように遠くから見たとしたら見えるのかもしれない。やばいこれはインスタ映えだ。慌ててスマホを取り出し、写真を撮っていく。

とりあえずこの1本道を歩いていこう。今までもそうしてきたじゃないか。日本人なら、はじめから決められているレールの上を歩くのは得意だ。

幼稚園、小学校、中学校、高校と、来たんだからとりあえず決められたことをやってきたことを思い出す。

少し歩くとウサギがこっちへ向かって歩いてくる。ウサギとは言っても二足歩行しているのでウサギ人間のような人なのだろうか。背の丈およそ1メートルぐらい小柄なうさぎである。

まるで、ゲームの世界に迷い混んだようだ。こんなの見たことない。

うさぎはこちらに来ると

「人間？。久しぶりにごちそうにありつけそうだ。いやいや、もしよかったら友達にならない？」

と、赤い目で話しかけてくる。飼育小屋でうさぎを学校のみinnで飼っていた時はとても可愛らしいうさぎだったのに、大きさが変わるだけでこうも不気味で怖いものにかわってしまうのか。

うさぎが話をしていることもおかしいし、おおきさもやっぱりおかしい。

「すみませんがそれはできません。山に登らなくてはならないのです。」

「どうして山に昇るの？ 一体なんのために？ それは本当に君がしたいことなの？」

「そう言われても、、、」

うつむき加減で答える。

「いつもそうやって生きてきたんじゃないの？ 流されるまま生きて、そこで何かを君は手に入れたのかい？」

なんで初対面のウサギなのにこんなにもしつこいんだろう。めんどくさいと思いながら無視をして先に進もうとする。

腕を掴まれた。

「いたいっ！！ 離してよ！！！」

「とりあえずきてもらおうか。」

いつもこうだ、どこにでも自分の思い通りにならないと気がすまないやつがいる。そんなときの対処法はこう。私は足元に置いてあった石を掴むとウサギの顔にぶつけた。一目散に走って逃げた。向こうはのたうち回って痛がってる。

めんどくさいやつに何を言ってもだめなんだ。これは16年の歳月を得て学んだこと。



ダッシュで道を進んでいく。後ろからウサギが猛烈な勢いで追っかけてきた。手にはなにやら3メートルぐらいの丸太を抱えている。私の数十メートル後ろからジャンプをし、丸太を背後に構え、これは剣道のめんをしようとしてる。

その時だ、茂みの方から1人の少年がサッと出てきた、短剣を構えてその丸太をきりきぎむ、これはネギの小口切りだ。なんとなく先週の家庭科の授業が思い出された。

「大丈夫？」

少年はそういうと私の前にでてうさぎをけん制する。うさぎは調子を崩して逃げ出した。

「君は人間なの？」

二足歩行のうさぎを見た後なので、怪しくなって聞いてみた。どう見ても人間にしか見えないけど。

「そう人間だよ。どこから来た？」

どうのことだろう？ この少年もここに最近来たのだろうか？

「僕はそらだよ。斉藤そら。」

小学生の高学年ってところだろうか。

「私にあんず。日本人でいいんだよね？」

話が通じると言うことは同じ日本から漂流者ということになる。

「どうしてここに？」

お互いに同じことを言ったので言葉が重なった。そして緊張のひもが溶けて2人して笑ってしまう。そしてぽつりとそらから、

「たぶん死んだんだと思う。」



## 少年の生き立ちと、さらなる希望

「それってさ、どーゆうーことなの？ 2人とも生きてるけど、死んだってこと？」

「そうぼくの場合は親がちょっとあれなんだ。母親と2人で暮らしていたんだけど、彼氏みたいなのが来てさ、」

まじか？ こんな令和の時代にまだそんな毒親がいるなんて、思いもしなかった。

「ごめん分かった。分かったからいいよ。」

何かくずっている。それもそのはず。この子はまだ小学生ぐらいだ。それにしてもさっきウサギをやっつけたのはどういうからくりがあるのだろうか。取り敢えず落ち着くまで待ってみるしかなさそうだ。

涙をふいて落ち着いてきたのを見計らって聞いてみる。

「ここにはいつ頃来たの？」

「半年前だよ。何かこの国を守るための勇者が来るらしいから、見に来たらお姉さんがいたんだよ。

それにしてもどこにいるんだろうね。もうちょい待ってみるよ。今日中には来るはずなんだ〜。」

まー、私が勇者のわけないし。私も待ってみるか。どっちにしろ行く宛がないのだから。それにしてもなんとなくこの子の顔、見覚えがあるんだよね。あれ、この子って嘘でしょ？！





---

勇者がボスを倒しに行く

---

著 茜色 一凛

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---